

第8回基礎学習理論研究会 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

◇開催日時 2020年1月23日(木) 19時30分～22時00分

◇会場 中澤研究室

◇参加者 河野(附属小)、島(郡山西小)、石田(左京小)、中澤哲(平群北小)
新宮(平城小)、中澤敦(近畿地方ESD活動支援センター)、中澤

◇内容

『新訳版・思考と言語』ヴィゴツキー著、柴田義松訳、新読書社、2001年
第3章「シュテルンの心理学説におけることばの発達の問題」の購読

1. シュテルンの子どものことばおよびその発達に関する純粋に主知的な見解について

(1) ことばの3つの根源

①表現的傾向 赤ちゃんは不快であるから泣く(この傾向はヒトだけではない)
(だれかに向けて、ではないというピアジェの見解と同じ)

②伝達への社会的傾向 例えば、犬でも威嚇するために鳴く(ヒトだけではない)

③意図的傾向 (ヒトに固有の特徴)

意図とは、一定の意味に向けられた方向性

人間は精神発達の一定の段階で、何かある客観的なものを標示する能力(意図的行為を行う能力)を獲得する。

この意図的行為は、思考行為であり、意図の表現は、言葉の知性化。客観化を意味する。

→ 言葉は思考するためのツールである。(主知主義:感性よりも知性を重視する)

②と③を合わせると、ヒトは思考表現としてことばを使用すると限定される。感性表現のことばの使用は認められていない?

(2) ことばの特性

①ことばには意味がある、客観的である

②ことばの獲得が思考発達における一定の水準を担保する

③ことばの獲得・使用と論理的思考力には関連がある

(3) シュテルンが述べることばの発達の根源・原動力について

①表現的傾向(上述)

②コミュニケーションの傾向(上述の伝達への社会的傾向)

③言語衝動の意図的傾向

← どのような根源からどのような道を通って人間のことばの意味づけが発生したのかという問いについて何も答えていない

2. ヴィゴツキーによるシュテルンの見解への批判的考察

・子どもは1歳半から2歳の間、「シンボルの意識とそれへの欲求の覚醒」という人生最大の発見の1つを行う「すべての物には名前がある」こと

・シュテルンはそれを、子どもの思考活動であると捉えている「すべての対象に名前をもたせようとする要求は、子どもがもつ真の一般的概念である」

→ 子どもは1歳半で記号と意味の関係、ことばの象徴的機能の自覚、「言葉の意味とそれを獲得す

る意欲の意識」、「一般的規則の意識と一般的思想の存在」に気付いているということになる。

・子どもは人生のなかでいちどにことばの意味を発見するのではない。意味づけの道程を無限に単純化している。

(1) 子どもによって「発見される」言葉と物のあいだの結びつきは、物がもつ様々な性質と同様の属性・特性である。子どもは記号—意味の内的関係より、物—言葉の純粹に外面的な構造を習得する。

(2) 「発見」は「いちどに」「瞬間」ではなく、長い複雑な変化の進行

・シュテルンによる正しく見出された変革的モメント・功績

①モメントの到来と同時に名前の質問（これ、なに？）が発生する

②語彙の飛躍的増大

(3) シュテルンの見解の問題点

・ことばの発達過程を意図的傾向で説明しようとするところ。

・外言から内言への移行期を無視しているところ

・シュテルンはモイマン批判において、自ら子どものことばの「原始的発達段階」において、「対象の指示としており、意図や発見ではないと述べている点。

・「意味づけは意味づけへの傾向から生まれる」言葉の特性に依存している。

・子どものことばの発生・習得において、2つのモノが必要である。ことばへの意欲という内的素質と周囲の人々によって与えられることば。

・社会環境は量的に関係するのみであり、発達過程そのものは、自己に内在的な法則性に従うもの

・人格形成過程において、ことばの習得は必然的なものと、自己発生的なものと捉えており、周囲の社会的影響を過小評価している点。